

## I'-制限と格隣接効果再訪

### I'-Restriction and the Case-Adjacency Effect-revisited

阿部 幸一†  
Koichi ABE

**Abstract** : We will observe two different adverbial behaviors between English and French: I'-Restriction and the Case-Adjacency Effect. We already have dealt with the Case-Adjacency Effect in Abe (1994) and Abe (1996). Thus we will concentrate on I'-Restriction in this paper, after that the Case-Adjacency Effect is revisited.

It is clarified that I'-Restriction and the Case-Adjacency Effect are closely related. This relation is also seen among other languages.

#### 0. 序

本論文では、英語と仏語の副詞の振る舞いを巡る、二つの大きな違いである、「I'-制限」と「格隣接効果」について観察する。が、「格隣接効果」に関しては、既に私のいくつかの論文で扱っているため、まずはじめに、「I'-制限」を取り上げ、次に「格隣接効果」再訪という形で触れたいと思う。

#### 1.1 「I'-制限」

この章では、次の例に見られるような、英語と仏語の副詞の振る舞いに焦点を合わせて考察することにする。

- (1) a. John *probably* has made several mistakes.  
b. \*Jean *probablement* a fait plusieurs erreurs.

Ernst (2002)は、仏語の場合には、文副詞が主語と動詞の間に生ずることができないという状況を、I'-Restriction (I'-制約)と呼んでいるので、これに倣うことにする。

- (2) I'-Restriction: 「何ものも I'(T')に付加できない。」

(Ernst (2002:388))

#### 1.2 Ernst (2002)

Ernst は、I'-制限を巡る議論の中で、従来の分析を批判し、自らの代案を立てているが、ここではその詳細まで立ち入る余裕はないので、関係する点のみ列挙したいと思う。

まず始めに、主に英語と仏語を対比すると、次のように副詞の種類によって、振る舞いの違いが見られる。

- (3) a. Claude {*probably* / *softly*} calls his cat.  
b. Claude {*probably* / \**softly*} has called his cat.  
c. Claude has {*probably* / *softly*} calls his cat.  
(Ernst (2002:393))

- (4) a. Claude {\**probablement* / *doucement*} appelle son chat.  
Claude probably softly calls his cat  
b. Claude {\**probablement* / \**doucement*} a appelle  
Claude probably softly has called  
son chat.  
his cat  
c. Claude a {*probablement* / *doucement*} appelle son chat.  
Claude has probably softly called his cat  
(同上)

(3)から分かることは、英語の場合、いわゆる助動詞位置(主語と助動詞の間)には、文副詞しか来ることができないが(3b)、助動詞の後、及び動詞の前には、文副詞も述語副詞も可能

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

である(3a,c)。一方、(4)の事実からは、仏語の場合、(文副詞や述語副詞といった)副詞の種類に関わらず、助動詞の直前に副詞が来ることは許されない(4b)。助動詞と動詞の間には、文副詞も述語副詞も同様に来ることができるが(4c)、動詞だけの場合には、直前に来るのは述語副詞しか許されない(4a)。

Ernst 自身は例として挙げていないが、仏語には文副詞に対して、次のような表現が可能である。

(5) a. *Probablement* (que) Marie viendra demain.

probably that Marie will come tomorrow

b. *Probablement* Marie viendra-t-elle demain.

probably Marie will-come-she tomorrow

これらの例では、副詞が complementizer の外に現れたり、倒置を伴うので、通常の構文とは考えられないので、ここでの対象外とする。

但し、英語でも、pause を伴って、文頭に述語副詞が現れる場合がある。が、これは水野 (2003)で述べられているように、一種の話題化と考えるべきだろう。

(6) a. *Cleverly*, John talked to his mother, and *stupidly*, he played with his nephew.

b. *Quickly*, Tom closed the barn door so as to not let the animals out.

(水野 (2003:73))

同様の例を仏語に対しても Ernst が挙げているが、これらも純粋な文副詞とは考えらず、一種の話題化と考えた方が良いと思われる。

(7) a. {*Certainement* / *Souvent* / *Stupidement*}, Jean-Pierre {certainly / often/ stupidly}

a parle a Marie. Jean-Pierre

has spoken to M.

(Ernst (2002:387))

いずれの場合にせよ、文頭の位置は一種の話題化の位置と考えた方が良さそうなので、これ以上は踏み込まないことにする。

(3)から(7)の込み入った仏語と英語の副詞の I'-制限を巡る違いを表にすると、次のようになる。

(8) <文頭> <助動詞の前> <助動詞と動詞の間>

英語: 文副詞/ 文副詞/\*述語副詞 文副詞/述語副詞  
(述語副詞)

仏語: (文副詞)/ \*文副詞/\*述語副詞 文副詞/述語副詞  
(述語副詞)

<動詞の前>

英語: 文副詞/述語副詞

仏語: \*文副詞/述語副詞

Ernst によると、従来の分析(Williams (1993), Bouchard (1995))では、V位置からI位置への上昇が許されないとして、仏語の I'-制限の説明がなされていた。しかし、彼らの分析では、英語や中国語などが単なる例外となり、一般的な説明になっていないとして Ernst は退けている。

(9) Tamen bu *tiantian* dou hui ba pijin he-wan.

they not every-day all will BA beer drink-finish

(Ernst (2002:391))

Ernst の次の批判の対象となる分析は、Zwart (1996), Pollock (1997), Alexiadou & Anagnostopoulou (1998), Cinque (1999)であるが、ここでもその詳細に立ち入る余裕はない。が、総合すると、これらの分析の問題点は、1) 言語間の違いを記述はできているものの、その違いを生じさせる移動の引き金となるものが明確でない、2) Pollock や Cinque の分析では、不必要に空の機能範疇を仮定している点で問題がある、として退けている。

### 1.3 普遍的考察

ここでは、英仏語以外の他言語にも、I'-制限があるかどうか観察してみる。

(A) ロマン系言語:

(10) a. Gianni *stupidamente* accetto di venire.

Gianni stupidly agreed to come

(イタリア語)

b. O Paulo *provavelmente* foi para Paris.

Paul probably went to Paris

(ポルトガル語)

c. Juanita *siempre* va con nosotros.

Juanita always goes with us

(スペイン語)

(Ernst (2002:389))

(10)の例から明らかなように、仏語と同じロマンス系言語に属すこれらの言語では、仏語と異なり I'-制限を受けないようである。このことから、同じロマンス系言語内でも、仏語と他のロマンス言語の違いを説明する必要がある。

(B) ゲルマン系言語:

- (11) a. Helge vil gerne laese den her bog.  
Helge will readily read this here book  
b. \*Helge gerne vil laese den her bog.  
Helge readily will read this here book

(デンマーク語)

(Ernst (2002:388-9))

- (12) a. \*Det var en overraskelse at Helge ville gerne  
It was a surprise that Helge would readily  
laese den her bog.  
read this here book  
b. Det var en overraskelse at Helge gerne ville  
It was a surprise that Helge readily would  
laese den her bog.  
read this here book

(同:389)

ここでは、Ernst (2002)から、ゲルマン系に属するデンマーク語の例を挙げたが、そこでは主節と従属節に関して、ねじれ現象が起こっている。しかし、次のドイツ語の例に見られるように、主節と従属節では逆転は起こっていないので、この逆転現象は、デンマーク語特有のものと考えられる。

- (13) a. Es war eine Überraschung, dass Helge gern das  
Buch lesen wurde.  
b. Es war eine Überraschung, dass Helge das Buch  
gern lesen wurde.

ゲルマン系言語の場合には、V2 現象の要請により、通常、主節では第一要素に主語が来て、第二要素には動詞が来るのが普通なので、他に副詞が来ることのできる位置は文頭である。

- (14) Gerne wird Helge dieses Buch lesen.  
readily will Helge this book read

(11b)のように、副詞が主語と動詞の間に来ると、動詞が第二要素になっていないので、許されない構造である。一方、(言語間の違いが見られるものの)従属節では副詞は主語の後に来ることが可能である。以上のことから、ゲルマン系言語の場合には、I'-制限を受けないと仮定される。

(C) 中国語と日本語:

まずは中国語から、見てみよう。

- (15) a. Wo jihu zhengye shui bu zhao jiao  
I almost allnight sleep(v) not complete sleep(n)  
b. Ta shizhong mei lai  
he at last didn't come

これらの例を見る限り、中国語は I'-制限を受けないようである。

次に日本語の場合を見てみよう。一般に副詞は自由に現れることが可能と思われる。

- (16) a. 彼女はいつも約束の時間に遅れる。  
b. 彼女は約束の時間にいつも遅れる。

このことから、日本語は I'-制限は受けないと思われる。

以上のことを表にまとめると、次のようになる。

(17)	I'-制限
英語	×
仏語	○
伊語/西語	×
ドイツ語	×
日本語/中国語	×

この表で見ると、I'-制限は仏語特有の現象のように思われるかもしれない。が、即断する前に、これに対応する現象として格隣接効果現象を、再考してみることにする。

## 2. 格隣接効果再訪

2.1 Abe (1994)では、次に見られるような、副詞に関する英語と仏語の統語的な違いを、極小主義の立場から説明を試みた。

- (18) a. \*John kisses often Mary.  
b. Jean embrasse souvent Marie.

(18a)に見られる現象は、古くは Postal (1974)では、Interpolation Ban によって、Chomsky & Lasnik (1977)では、\*V Adjunct NP という filter によって説明されてきた、極めて良く知られた現象である。

Stowell (1981)では、格理論に基づいて、副詞が動詞と目的語の間に生じえないのは、副詞が介入すると、目的語は動詞から格付与されないからであり、そのことから「格隣接効果」と呼ばれるようになった。その後、生成文法内部の理論の変遷に伴い、最近の極小主義では、格の照合そのものが、Stowell や Chomsky (1981)等の統率束縛理論で捉えられていたような、「主要部—補部」との関係ではなく、「指定辞—主要部」の関係で捉えられるようになり、もはや隣接という関係では説明できなくなっている。しかし、ここでは現象として、基づく枠組みに関わらず、従来どおり「格隣接効果」という用語を使い続けることにする。

格理論によらない説明として Pollock (1989)は、英語と仏語の副詞を巡る現象の違いは、動詞の移動に関する問題として、よって、仏語の場合には、動詞は顕在的に移動すると仮定されるので、顕在的に移動しない(19b)は非文であるが、顕在的に移動した(18b)は文法的と予測される。一方、英語の場合には、顕在的に動詞は移動しないので、顕在的に移動しない(19a)は文法的であるが、顕在的に移動した(18a)は非文と判断される。

(19) a. John *often* kisses Mary.

b. \*Jean *souvent* embrasse Marie.

しかし、Abe (1994)では、英語と仏語の副詞を巡る現象の違いは、従来の(18),(19)の対比だけでは不十分であり、I'-制限のところを観察されたように、(20a,b)の対比にも着目する必要があると指摘した。

(20) a. John *probably* has made several mistakes.

b. \*Jean *probablement* a fait plusieurs erreurs.

しかも両者は表裏一体をなすという観点から、副詞を巡る英語と仏語の違いは、i) 英語には法助動詞が存在すること及び、ii) 仏語には接語(clitic)が存在することが、深く関わっていると考え、ModP(法助動詞を認可する機能範疇)と ZP(接語を認可する機能範疇)を想定することによって、いわば、英語の場合には文副詞の認可に関して、ModP が重要な働きをし、一方、仏語の場合には、接語のための ZP の存在が、副詞の認

可に関わるとした。(詳しくは、Abe (1994)参照)<sup>1),2)</sup>

(21) George probably [<sub>ModP</sub> *can*] read the book.

(22) Marie [<sub>ZP</sub> *me*] connait.

Marie me knows

続く阿部 (1996)では、Abe (1994)でなされた分析を、接語という観点から、より多くの言語(イタリア語、スペイン語、ドイツ語、オランダ語、日本語、中国語)を調査することにより、Abe (1994)でなされた分析が正しいことを証明した。そこでは、次のような観察がなされた。

(A) ロマン系言語(イタリア語とスペイン語):

i) 接語を持つ。

(23) a. Giovanni *lo* promis a Piero.

Giovanni it promised to Piero

(イタリア語) (Burzio(1986))

b. Miguelito *le* regalo un caramelo.

Miguelito him gave a candy

(スペイン語) (Jaeggli(1982))

ii) 格隣接効果を示さない。

(24) a. Si leggeranno *volentieri* alcuni articoli.

one will read willingly a few articles

(イタリア語) (Burzio(1986))

b. Pedro copia *frecuentemente* artículos de lingüística.

Pedro copies often articles of linguistics

(スペイン語)

(B) ドイツ語とオランダ語:

i) 接語が存在する。<sup>3)</sup>

(25) a. Jan heeft *'r* gisteren gekust.

Jan has her yesterday kissed

(オランダ語) (Zwart(1993))

b. Er sah *'s*.

He saw it

(ドイツ語)

(但し、V2言語では、従属節では動詞が最後に来ることが要

求されるので、接語は生じえない。例文は省略。)

ii) 格隣接効果を示さない。

(26) \*Jan heeft gisteren'r gekust.

Jan has yesterday her kissed

(ドイツ語)

(C) 日本語と中国語

i) 接語は存在しない。

ii) 格隣接効果を示すと考えられる。

日本語の場合は、副詞が動詞と目的語の間に来ると、目的語の格標示がないと、容認性が落ちる。

(27) a. ??何最近読んでの

b. 何を最近読んでの

c. ??何昨日食べたの

d. 何を昨日食べたの

中国語の場合は、副詞は動詞の前のみ起り、動詞の後には起らない。

(28) a. 我 經常 吃 麵条。

Wo *jingchang* chi miantiao.

I alway eat noodles

b. \*我 吃 經常 麵条。

Wo chi *jingchang* miantiao.

各言語に見られる、接語の有無と、格隣接効果の関係を表にすると次のようになる。

(29) 言語	接語の有無	格隣接効果を示す
英語	×	○
仏語	○	×
伊語／西語	○	×
独語／蘭語	○	×
日本語／中国語	×	○

正に、(29)の表から明らかのように、接語の存在と格隣接効果との関係が明らかになった。

2.2 次に、ここで明らかになった接語と格隣接効果の関係を、

前の章で観察した I'-制限とひっくり返って考察したいと思う。が、その前に英語の歴史的事実を考慮する必要があると思われる。現代英語には、接語は存在せず、したがって格隣接効果も示さないが、ME 期には接語が存在し、格隣接効果を示したと考えられる。<sup>4)</sup>

(30) Ich *hit* wulle heortlicher

I it want very much

(c.1225 Ancrene Wisse 199,23 (Roberts (1985)))

ME 期には副詞が動詞と目的語の間に来ることができたという主張が、Lightfoot (1979)でなされている。

(31) ME 期において、軽い副詞は規則的に直接動詞の後の位置(つまり動詞と目的語の間)に現れることができたが、Early New English 期あたりから、可能でなくなった。:

\*he wrote *well* the poem, \*he touches *lightly* her shoulder

(Lightfoot (1979,177-8))

以上のことから明らかのように、英語における接語の消失と格隣接効果が同時進行していたことが伺える。その変化が生じたのは、おおよそ 16 世紀頃だと仮定される。(水野 (2003) 参照)

これまでのことがらを、英語の歴史的考察を含めて、接語、格隣接効果、I'-制限をめぐる各言語の違いを示すと次のようになる。

(32) 言語	接語	格隣接効果	I'-制限
古、中英語	○	×	○
現代英語	×	○	×
仏語	○	×	○
伊語／西語	○	×	×
独語／蘭語	○	×	×
日本語／中国語	×	○	×

この表から明らかなのは、歴史的に観ると、英語はいわば仏語型から、日本語／中国語型に代わったと考えられる。もし、接語の存在が格隣接効果と密接な関係にあるとしたら、I'-制限をもたらしているものは何か。Abe (1994)で見たように、ModP の存在が関与していると言えるどうか。同じロマンス言語でも、仏語との違いは何処からくるのか。ゲルマン語との違いは、どうなっているのか。さらにまた、格隣接効果と I'-制限を

結びつけるものは何であり、英語の歴史的変化を起しているものは、何なのか。以上のことを、次の論文では、理論的に考察したいと思う。

(注)

1) 英語の場合には、法助動詞を認可するための Mod Phrase が存在するため、副詞もその head によって認可されるとした。一方、仏語の場合には、副詞が動詞と目的語との間に生じると、本来最小性の原理によって非文となるはずであるが、動詞の上に仮定される接語のための Phrase である ZP を、副詞が escape hatch として使用することによって、最小性の原理を免れると仮定した。

2) 英語の Mod Phrase については、統語的にも意味的にも、その句を仮定することができるが、仏語の接語のための Z Phrase については、統語的には仮定できるが、意味的な説明は難しい。その点に関して、Chomsky (1993)では、接語の派生に巡って、基底で XP として生成させ、動詞に X として付加するという、かなり奇異な分析を仮定している。

3) Laenzlinger (1998)では、ゲルマン語の接語は、ロマンス語ほど確立した存在 (strong pronoun) ではないので、weak pronoun と呼んで区別しているが、ここでは接語として同列に扱うことにする。

4) 今日でも、接語の名残として methinks (=it seems to me) という表現が古語として残っている。

(参考文献)

- Abe, K.(1994) "Differences in Adverbial Behavior between English and French: A Minimalist Approach," *Harvard Working Papers in Linguistics*, vol. 4, 3-18.
- 阿部 (1996) 「格隣接効果を巡って一副詞と接語の観点から」『言語の深層を探ねて』中野弘三博士還暦記念論文集, 英潮社, 21-35.
- Alexiadou, A. & E. Anagnostopoulou (1998) "Parametrizing AGR: Word Order, V-Movement and EPP-Checking," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491-539.
- Bouchard, D. (1995) *The Semantics of Syntax*, Chicago: University of Chicago Press.
- Burzio, L. (1986) *Italian Syntax*. Dordrecht: Reidel.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in K. Hale and S. J. Keyser, eds, *The View from Building 20*, 1-52, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Chomsky, N. & H. Lasnik(1994) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
- Cinque, G. (1997) *Adverbs and Functional Heads: A Crosslinguistic Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Ernst, T. (2002) *The Syntax of Adjuncts*, Cambridge Studies in Linguistics 96, Cambridge University Press.
- Jaeggli, O. (1982) *Topics in Romance Syntax*, Dordrecht: Foris.
- Laenzlinger, C. (1998) *Comparative Studies in Word Order Variation*, Linguistik Aktuell 20, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lightfoot, D. (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 水野 (2003) = Yoshida, Eiko. M.(2003) *Adverb Licensing and Clause Structure*, Doctoral Dissertation, Nagoya University.
- Pollock, J.-Y.(1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry*, 20, 364-424.
- Pollock, J.-Y. (1997) "Notes on Clause Structure," *Elements of Grammar*, 237-279.
- Postal, P. (1974) *On Raising*, Cambridge, Mass: MIT Press.
- Roberts, I. (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Dordrecht: Foris.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Williams, E. (1993) *Thematic Structure in Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Zwart, J.-W.(1993) "Verb Movement and Complementizer Agreement," *Papers on Case & Agreement: I*, MIT Working Papers in Linguistics vol.18, 297-340.
- Zwart J.-W. (1996) *Morphosyntax of Verb Movement*, Dordrecht: Kluwer.

(受理 平成17年3月17日)